

# 当麻

世阿弥作

前

ワキ 旅僧

シテ 化尼

ツレ 化女

後

ワキ 前に同じ

シテ 中将姫

ワキ次第

「教へうれしき法の門。く。開くる道に出でうよ。

詞

「是は念仏の行者にて候。我此度三熊野に参り。下  
向道に趣きて候。又是より大和路にかゝり。当麻  
の御寺に参らばやと思ひ候。

道行

「程もなく。帰り紀の路の関越えて。く。こや三  
熊野の岩田川。波も散るなり朝日影。夜昼わかぬ  
心地して。雲も其方に遠かりし。二上山の麓なる。  
当麻の寺に着きにけり。く。

シテサシ

「一念弥陀仏即滅無量罪とも説かれたり。

ツレ

「八万諸聖教皆是阿弥陀とも有りげに候。

シテ

「釈迦は遣り。

ツレ

「弥陀は導く一筋に。

二人

「心ゆるすな南無阿弥陀仏と。

シテ一声

「称ふれば。仏も我もなかりけり。

ツレ

「南無阿弥陀仏の声ばかり。

シテ

「涼しき道は。

二人「頼もしや。

次第「濁りにしまぬ蓮の糸。くくの。五色にいかで染みぬらん。

シテサシ「有難や諸仏の誓ひ様々なれども。わきて超世の悲願とて。迷ひの中にも殊に猶。

二人「五つの雲は晴れやらぬ。雨夜の月の影をだに。知らぬ心の行くへをや。西へとばかり頼むらん。実  
にや頼めば近き道を。何遙々と思ふらん。

下歌「末の世に。迷ふ我等が為めなれや。

上歌「説き遺す。御法は是ぞ一声の。くく。弥陀の教へを頼まずは。末の法。万年々経るまでに。余経の法はよもあらじ。たましく此生に浮まずは。又いつの世を松の戸の。明くれば出で、暮るゝまで。法の場に交じるなり。御法の場に交じるなり。

ワキ詞「如何に是なる方々に尋ね申すべき事の候。

シテ詞「何事にて候ふぞ。

ワキ「是は当麻の御寺にて候ふか。

シテ「さん候当麻の御寺とも申し。又当麻寺とも申し候。

ツレ「又是なる池は蓮の糸を。すゝぎて清めし其故に。

染殿の井とも申すとかや。

シテ「あれは当麻寺。

ツレ「是は染寺。

シテ「又此池は染殿の。

ニ人「色々様々所々の。法の見仏聞法ありとも。それを

もいさや白糸の。唯一筋ぞ一心不乱に。南無阿弥陀仏。

ワキ「実に有難き人の言葉。即ち是こそ弥陀一教なれ。

さて又是なる花桜。常の色には変はりつゝ。是も故ある宝樹と見えたり。

ツレ「実によく御覧じ分けられたり。あれこそ蓮の糸を染めて。

シテ「掛けて乾されし桜木の。花も心の有る故に。蓮の色に咲くとも云へり。

ワキ「中々なるべし本よりも。草木国土成仏の。色香に染める花心の。

シテ「法の潤ひ種添へて。

ワキ「濁にしまね蓮の糸を。

シテ「すぎぎて清めし人の心の。

ワキ「迷ひを乾すは。

シテ「緋桜の。

地「色はえて。掛けし蓮の糸桜。く。花の錦の経緯に。雲の絶間に晴れ曇る。雪も緑も紅も。唯一声の誘はんや。西吹く秋の風ならん。く。

ワキ詞「猶々当麻の曼陀羅の謂委しく御物語り候へ。

地クリ「そもそも此当麻の曼陀羅と申すは。人皇四十七代の帝。廢帝天皇の御宇かとよ。横佩の右大臣豊成と申し、人。

シテサシ  
「其御息女中将姫。此山にこもり給ひつゝ。

地  
「称讚浄土経。毎日読誦し給ひしが。心中に誓ひ給ふやう。願はくは正身の弥陀来迎あつて。我に拝まれおはしませと。一心不乱に観念し給ふ。

シテ  
「然らずは畢命を期として。

地  
「此草庵を出でじと誓つて。一向に念仏三昧の定に入り給ふ。

クセ  
「所は山陰の。松吹く風も涼しくて。さながら夏を

忘れ水の。音も絶々に。心耳を澄ます夜もすがら。称名観念の床の上。座禅円月の窓の内。寥々と有る折節に。一人の老尼の。忽然と来りたゞずめり。是は如何なる人やらんと。尋ねさせ給ひしに。老尼答へて宣はく。誰とはなどや愚かなり。呼べばこそ来りたれと。仰せられける程に。中将姫はあきれつゝ。

シテ  
「我は誰をか呼子鳥。

地「たづきも知らぬ山中に。声立つる事とては。南無阿弥陀仏の称へならで。又他事もなき物をと。答へさせ給ひしに。それこそ我名なれ。声をしるべに來れりと。宣へば姫君も。さては此願成就して。正身の弥陀如来。實に來迎の時節よと。感涙肝に銘じつゝ。綺羅衣の御袖も。しをるばかりに見え給ふ。

ロンギ地「實にや貴き物語。即ち弥陀の教へぞと。思ふに付

けて有難や。

二人「今宵しも。二月中の五日にて。しかも時正の時節なり。法事をなさん為め。今此寺に來りたり。

地「法事の為めに來るとは。そもや如何なる御事ぞ。

二人「今は何をか包むべき。其いにしへの化尼化女の。

地「夢中に現じ來れりと。

二人「言ひもあへねば。

地「光さして。花降り異香薫じ。音樂の声すなり。

恥かしや旅人よ。暇申して帰る山の。二上の嶽とは二上の。山とこそ人はいへど。誠は此尼が。上りし山なる故に。尼上の嶽とは申すなり。老の坂を登り登る。雲に乗りて上りけり。紫雲に乗りて上りけり。(中入)

ワキ詞

「かく有難き御事なれば。重ねて奇特を拝まんと。

歌

「いひもあへねば不思議やな。く。妙音聞え光さし。歌舞の菩薩の目のあたり。頭はれ給ふ不思議

さよ。く。

後ジテ

「唯今夢中に頭はれたるは。中将姫の精魂なり。我娑婆に在りし時。称讚浄土経。朝々時々怠らず。信心誠なりし故に。微妙安樂の潔界の衆となり。本覚真如の円月に座せり。然れどもこゝを去る事遠からずして。法身却来の法味をなせり。

地

「有難や。尽虚空界の莊嚴は。眼は雲路にかゝやき。

シテ

「転妙法輪の音声は。聴宝刹の耳に充てり。



地「蕭然とある暁の心。

シテ「誠に涼しき。道に引かるゝ光陰の心。

地「惜しむべしやな。く。時は人をも待たざる物を。

すなはちこゝぞ。唯心の浄土経。いたゞきまつれや。

く。攝取不捨。

シテ「為一切世間。説此難信。

地「之法是為甚難。

シテ「実にも此法甚しければ。

地「信ずる事も難かるべしとや。

シテ「唯頼め。

地「頼めや頼め。

シテ「慈悲加祐。

地「令心不乱。

シテ「乱るなよ。

地「乱るなよ。

シテ「十声も。

地「一声ぞ有難や。（早舞）

シテ「後夜の鐘の音。

地「後夜の鐘の音、鳧鐘の響き。称名の妙音の。見仏聞法の色々の法事。実にも普ねき光明遍照。十方の衆生を。唯西方に迎へ行く。御法の舟の水馴棹。御法の舟のさをなぐるまの。夢の夜はほのぐとぞなりにける。